太棹

第百四十三號

昭和十六年三月廿八日
第三種郵便物認可

昭和十八年三月廿八日 印刷納本
昭和十八年三月廿一日 發行

（毎月一回 廿五日發行）

太棹（第百四十三號）

風流・金ぷら・茶漬
（美地句）
太田屋
新橋二ノ八
電銀二〇八

貸席
並木倶樂部
浅草・雷門
電話浅草一二三五番

御禮

東京臨時第一陸軍病院 太棹百四二號 五十冊
東京臨時第三陸軍病院 同三十冊
寄贈者 齋藤金太郎氏

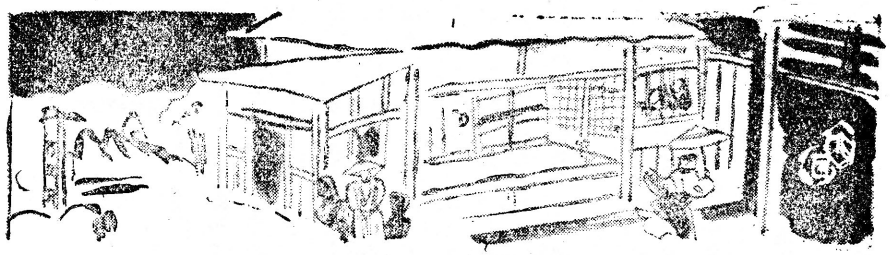
右弊社の趣旨に賛同せられ傷痍將士慰安として御寄贈を賜り候段難有奉深謝候

太棹社

新名譽會員
小柳團鳳氏

今回本誌後援名譽會員に御申込みを辱ふし難有御禮申上候

太棹社



太棹 第百四十三號目次

表紙・カット……齋藤清二郎
時局と藝能……伊藤紅二（二）
文樂を聽く……畑中長次（四）
床から人形に魂を送れ……中山泰昌（八）
文樂通信……西尾福三郎（一一）
和樂氏を偲ぶ……（一四）
▼中澤巴・近江清華・豊澤猿藏▲
東橋亭懐古……岡田蝶花形（一七）
マニラより……三五郎（一八）
太棹社彙報……（一九）
會報・消息……（二四）
當座帖……
編輯後記……富取生

時局と藝能

特に義太夫界に檄す

伊藤紅二

一きり昭和維新と云ふことをしきりに云はれたものだが、それは明治維新に對しての言葉としては稍々命題がちがつてゐるし、又生溫い感なきを得ないと思つてゐた。今は單に年號による昭和維新のもつ概念だけではどうにも表現のしてみようない所謂、世界がこれ新たなるべき即ち世界維新の秋であり、あらゆる階層のものが全くこの新體制、新機軸、新機構、新出發に對して協力以上の一心同體であらねばならぬときに藝界人（こゝでは無論、義太夫人を含むことを特に切言しておく、それは義太夫人とし云へばあらゆる藝界人中でも特に舊套であり、舊弊であり、固陋であり、頑迷であるかの如き印象を一般大衆に與へ、自分も亦、それを以つて古典藝術を確保してゐるものであるかの如き一の錯覺におそはれてゐるものが多いので、なほ更この言を强めるわけである。）に對してはこの際、文字通りの一新紀元を劃してもらひ度く又一大決心をもつて奮起され度く、更に一大勇猛心をもつて、この時局を突破開拓してもらひ度いと痛感してゐる次第である。

それは何が故にこと更らしく言葉をあらためるかと云ふことから申さねばならぬが、それはこの緊迫した時局下に於て世間からは稍々もすれば異端視され、遊閑視され勝の藝界が目立つて活氣を呈し、その一つのあらはれたる興行界の殷賑振りの如きはこの大東亞戰爭をかちぬく爲に前線、銃後大童のときとも思はれぬ有樣であることなどに徵しても十分に戒心の要があり、責任の重大なることを切實に感ずべきであると思つたからである。

世上往々にして健全娛樂と云ふ、しかり、健全娛樂であつてこそ果してこの使命を達し得るのであつて、かりそめにも單なる娛樂優先であつては相ならぬと思ふ。

健全であることを不可缺の條件とする事は吻々を要せぬ。

健全であつてこそ之を產業戰士の心の糧として與へた時に明日の生產面に新たな力と營養とを與へ得るのであつて、唯單に勤勞大衆におもねつて一時の感覺的な享樂に墮したとすれば、この御時世に一刻一瞬たりとも其の存在は許されないのである。

この喰ふか喰はれるかの國家が運命をかけての一大決戰のさ中に於て、たとへば安閑然として觀劇の出來ること、音樂

のきけること映畫の見れることそれ自體が既にありがたい勿體ないを通りこしてゐるのである。

然し、さればと云ふて、之等を一切返納すると云ふ氣持が端的にあらはれて、見ざる、きかざる、云はざるであつたらば果して如何と云ふに之は又、あまりにも人間本來の生命力を無視し、本能をしいたげた仕方であつて、既に問題外であると云ふ結論を生み出せる。

一體、長期戰であり、是が非でも勝ちぬかねばならぬからこそ、吾々は心の平衡を保つ必要があり、精神の糧をも攝取してゐなければならないのであつて、一日戰死位の氣持ちは是非とも一般大衆に要請する必要はあつても、一切合財を返納したのではそれ自體が、既に對米英戰に敗北を喫してゐるものと云はねばならぬ、更に明白に云ふならば、既に文化戰思想戰、藝能戰に於ての敗北であり、日本精神の破綻なりと思はねばならない。

況んや、日本古來の藝統を固守し培養したとも思はれる樣な、所謂、古典藝術なり、國粹藝術なり——こゝでは邦樂一般、歌舞伎、能樂、人形淨瑠璃等、ありとあらゆる日本特有の藝術を含む——をたゞ一朝一夕の近視眼的見界によつてかりにも輕視し、はては默殺し去る樣なことでもあつたとしたらば、之はまことに由々しい一大事とも思はねばならぬ。

之等わが國心をちりばめた藝術には、立派に國民道德がやどり、肇國の精神が嚴存し、八紘一宇の大理想がそのうらづけをなしてゐると自覺する必要がある。

之は決してつけ燒刃的なこぢつけではなく、かりにも國體精神なり、國民性の研究に一指をそめた人にはすぐ首肯出來る所のものである。

たゞ、時にわが國史の上に汚點ともおぼしきものゝ一二散見したことのあつた如く、之等、藝能界に又、人の眼を蔽はしむるが如き事件、乃至は作物のあらはれはあつたにしても國亂れて忠臣あらはるのたとへではないが、わが國史の上に如何がはしいと思はれる樣なものゝあらはれた時にこそ、わが國體精神が燦として輝き、又忠臣が突如としてあらはれてより以上に國體の明徵を顯現したそれにも比して、藝能界までそれと全く規を一にしてゐることに着眼せねばならぬ。

又、よし、それをもつてしてもなほ遺憾の點ありとしたならば、この世界史變改の大東亞戰爭を機緣にして藝能界の各人はおのがじし、火の玉となり、まさに思想文化藝能戰の彈丸と化して見事、第一線に散華すべきであると强く自覺するものである。とかく、遊閑視され勝ちの藝能人はこの千載一過のときにこそ、ます〳〵結束をかため、其の職域に對して眞劍なる認識をもち、苟くも卑下することなく、堂々たる態度をもつて邁進されん事を望んでやまない。

筆者の云はんとする所は稍々抽象的にも走つたうらみはあるが、現前、多事多端な藝能界をうちながめてこうした意識を特に深めてゐるので一文を草して斯界へのはなむけとしたのである。（藝能批評家）

文樂を聽く

畑中長次

昨冬演舞場で、文樂座第四の變りで齋藤拳三さんにお目にかゝり、つい初日から變り目毎に來て居ると申ますと、何でも其の感想を話せとの事です。年を取りまして誠に氣憶も悪くなりましたので、再三お斷りを致しましたが、熱心な齋藤さんは番組を持つて拙宅へお越しになり、とう〳〵うかゝお話をする事になりました。

第一回目　大隅さんの逆櫓は大體結構でした、樋口の言葉も、權四郎の言葉も結構です、よく此の人を調子をはずすと云ふ方がありますが、決して其んな事はありません、古靱さんを除けば唯一人の聽ける太夫です。

此の淨瑠璃は樋口の名乘りまでは大體端場に語らなくてはいけません、樋口の名乘りから堂々たる三段目になるのです。「苦勞する墨憂き事を」から、「そんじよ其處と」までは景事の如くノリマでサラ〳〵語らなくてはいけません、こゝは語れてゐませんでした。「そぞろ喜ぶ吾子の風情」は面白く語り、「お筆が胸に燒金さす」はガラリ變るべきです、津太夫さんは此處が悪かつたが、此の人も亦不出來でした、「月無き夜半の葉隱れ」から「尋ね廻る」は順禮唄の節です、此處もいけませんでした。

「供養なされ」以下を拔きましたが時間の爲でしやうか。

「若い者を大勢よんで來い」の樋口の言葉を世話に云ふのも本統です、「兼光よ」は濱邊の「兼光なるわ」と違つて靜かにやゝ小聲で云ふべきです、「殺されし土松は」を憂ひで云ふのもよく通りました、「お筆嬉しく若君を」以下はもつとサラ〳〵語つて頂きたいと思ひます、清二郎さんは若いがいゝ三味線です、勉強したらいゝ彈き手になるでせう。

七五三太夫さんの逆櫓は、語り過るので丸で文章の意味が解りません。これは西口政太夫口傳にもありますが、修羅場と申して口先で語るのです、さうするとかへつて文章が良く解ります。

義太夫の三味線は二段目、三段目、四段目、皆撥使ひが違

ひます。岡太夫や薩摩太夫を彈いてゐた金造は實によく彈きましたが、富助の處へ來て撥使ひを一段一段やかましく云はれたら丸で彈けなくなりました、恐しいものです。それは今までは二段目でも三段目でも同じ撥使ひだからよく彈けたのです。綱造さんの絃は實に結構です。

古靱さんの堀川は實に結構でした。此の日は「田舍がまし」と續けて語りました、婆はも少し老いくちた人にしてもらひたく思ひます。

「眼さへ不自由な暮しなり」は感心しません、もつとアゴを使つてもらひたいものです。此處はお素人ですが巴さんが上手でした。

「鳥邊山」の唄ひ分けは天下一品です、私は富助にやかましく云はれましたが、そうは云へるものではないと思つてゐましたが、すつかり理想が實現されてゐて恐れ入りました、越路さん以上です。

「鬼は迷度」も憂で結構でした、「其れにまだ〳〵」は與次郎が一寸つかへて考いてる樣で實に旨いものです。「お俊」の呼びが、すぐ側にゐる樣に聽けるのは偉いものです。「深い譯でも」は地味過ぎました。「十種香」の觀西翁さんの三味線は天性の四段目らしい撥使ひと音で結構でした。

奥庭は太夫も絃も感心しません、薩摩太夫(花靱太夫)などは御殿の艶ぽい語り方と對照的に、奥庭に實にすごみが有りました。これは普通の姫では無く狐が乘りうつつてゐるのですから、將にさうあるべきでせう。

壺坂は私の聽いたのでは組太夫程のはありません。組太夫さんが壺坂を演りたがるのを、番頭が仲々演らせませんでした。それを横濱の新富亭の樂の夜に演つたのです、入りの無い夜で客席より樂屋の聽手の方が多い位でしたが、實に結構で、一座の玄人が皆呼吸を呑んで聽きほれました。實に澤市と云ふ人は此んな人かと思ひました、それ以來私は壺坂は誰のを聞いても駄目です、自分でも決して演りません、其他は皆忘れてしまひました。

第二回目　酒屋はすつかり印象が有りません、私の聽いた内では古靱さんのマクラが大時代で結構でした。

大隅さんの紙茶の奥は太兵衞が結構でした。「ぞめき戻りの身すがら太兵衞」は綿撥と云つて、撥は皮へ當つてもあたつた樣な音を立てずに彈くのです、此のチッチリ〳〵チレトツツンは清二郎さんはもう一と呼吸です、此處の組太夫の妙味は天下一品でした。

故大隅太夫は組太夫の此の箇所をケレンだとこなしましたが、どうして「チョイ乘せの善六」などと共に實に旨いものでした。

「このつらを見よ」までの孫右衞門は武士に語らなくては治兵衞の大驚きが活きません、も少し時代に願ひたいものでし

す。

柳のカケ合は織太夫さんだけが本格なことを云つてましたが、他の人はいけません。

觀西翁さんの三味線は何を彈いても四段目で困ります、此の一段の三味線は斧の音が木魂する樣に聽こへなければ落第です。

私など富助に、お前のは木の小枝を切る音ではない、紙屑籠をかき廻す音だと云はれて最後まで落第でした。

第三回目　カケ合の九段目。九段目は此太夫風と云ふ人もあり、ふもと風とも云ふ人も有りますが、「奥深きイ」と、イを殘すのが風になつて居りますが、何れにしろ雪降りのシツトリとした情景を語らなくてはいけません。「脇差しさすかげに」は「か」は半ダクに「げ」は本ダクに語らなくてはいけません。「鶯の梅見付たる微笑顏」は も少し美しく聽かせて頂きたいものです。組太夫はあの惡聲で實に此處が麗らかな感じがしました。「賴みませう」の件の織さんは時代で結構でした。お石は「しとやか」だけで大星の奥方らしい所を見せ、他は石持ちの世話に語らなければいけません。

南部さんの小浪は結構でした。大隅さんの本藏は「だまれ」が、ゐばらないで上上でした、人によるとどなり附けるのがあります。

古靱さんの沼津は「稻村かげより」の處を聽き損じまして殘念でした、平作の言葉は結構でした。其他では「母もあい果て」を憂ひに旨く語りました、「拔足さし足」は もう一息です、「道を早め」…… の處を切らずにサラリと語つたのは結構でした。

清六さんは今の人では、私の一番好きな三味線です。「コロリとなれば」はゆつくり色つぽく彈いた方がいゝと思ひます、「嵐に」は絃で灯がゆれるのを彈く方があります、「道分石」のテンは字不足を絃が彈くか「間」を一字持つかすべきでせう。他には別段耳に殘つてるものはありません。

第四回目　杖折檻の伊達さんはもつと覺壽を手強く語らないと道明寺の仕込みになりません。

織さんの東天紅も不感服です、この場の言葉と地合は總て暗夜の内證事になつてゐるのです。

私は始め雷助さんに稽古をして頂きましたが、杉風會で澁澤得三さんが富助の絃で道明寺を語り私が其の前に東天紅を彈くので、富助師匠に稽古をしなほしてもらつたのです、處が思わくが丸で違ふのです、これは實に難かしい役場だと思ひました。

古靱さんの道明寺は實に美事なもので、全く恐れ入りました、よくあの難かしいお稽古を實行したものと、つく〳〵感服いたしました。「心ずかいの御一禮互につきぬ御名殘り」はモチヤ〳〵した實に語り惡い所ですが善く語りました。

水奴は實に結構で「お死骸を取上た御褒美を下されうで一番にお呼出し」など面白う御座いました、太郎も上等で「已れは如何して知りおつた」以下「やあぬかすな提燈の灯明で」のおどし文句は手にあせをにぎりました。

覺壽もこんないゝのを聽いた事はありません、「吾が科を人に塗り」以下の言葉は今でも耳にあります。

「これ〳〵伯母殿」以下の照國のタテ言葉は實にいゝ足取りでした。

「やあ〳〵判官先づ待たれよ」から「菅相丞は一間より」は聲の續かない所です、此處も美事でした。特に此の一段で至難なのは警固の僞迎いで、强そうな武士で、少し半途で輕妙に語るのですが「已れの眼が惡いのか見所に寄つて變るのか」など旨い事を云ふものだと、ほと〳〵感心いたしました。

「身は荒磯の島守と」から「荒木の天神」は故人大隅太夫が、すごかつた所です。

「申受けて女子の小袖」は、こ、そ、で、と三つに切つて語る樣に私は習ひましたが演りませんでした。其のくせ次の「吾が小袖」の方は、こ、そ、で、と切つて語つてゐました。

「また改る」で調子が上つてから清六さんは實によく彈きました。

これは西の政太夫もので、大團平の朱を實に善く彈いてゐました。物によつては此の人は先代以上でしやう、私は今では一番上手な三味線だと思ひます。

三段目になつて七五三太夫綱造さんの喧嘩は達者でした、それより南部さんの訴證が結構でした。

「大官所のかくで」が唄ひがかりで、よく「切つても捨てん所存よな」を涙で小さく言つたのは上上でした。八重も柔かでよく「老の腹立ち」の白太夫も上等でした。

大隅さんの寺子屋はやつぱり面白いものです、唯「妻が嘆けば」が唄へないのは引立ちません。

「色青ざめ」は結構でしだ、津太夫さんはこれは文章だから別に青ざめた樣に語らなくてもいゝと云つたとか聞きましたが、とんでもない事です。此のお方だけは頑固で松屋町がなほせないと言つてゐられました。

戸浪の言葉の「さい前の顏色」は實に結構でした、不思議がる思入れがよく通りました、こゝらが大隅さんの良い所です。「待たんせや」も口先で云つてよかつたと思ひます、「古手な事して」の呼吸も上手でした、「どこに居やるぞ」も小音で結構でした。「取まきめされ」も捕手に言つてるやうに聞へました。此の頃の大程の太夫はこれが捕手に云ふ樣に聽けません。「うかがい見て」も小音に憂がただよいました。

唯惡かつたのは「今日村のもてなしといつわり」以下のタテ言葉です、これは呼吸のつき方が惡くスキがありました。奥になつては觀西翁の絃がからいけません。（十頁へ續く）

床から人形に魂を送れ

——流石は鶴澤觀西翁の至言——

中山泰昌

第二世鶴澤觀西翁が、七十九歳の高齢を以て五十一年振に文樂座に復歸した——それは何を意味するであらうか。

五十一年といへば一ト人生を蹴飛ばした昔の事、現在の文樂の大幹部どころでも、其の當時の文吾や八兵衛と一緒に文樂の御飯を食べた者は殆どあるまい。さすれば翁は、今では文樂の大古參——といふ譯ではあるが、五十年も中斷しては「復歸」といふも聊かをかしい。いかに矍鑠たりとは云へ、法善寺まで彈いた昔の麒麟兒が、弱八十歳の老軀を提げて歸り新參の椅子に落ちつき、「孫」か「ひまご」のやうな弱輩達の掛合を彈く、年寄の冷水といふ感を免かれないことは事實であるが、翁から云へば、先師初代鶴澤寛治郎引退後の名蹟を襲いだ斯の「觀西翁」を、恩師の爲に文樂座の記錄に殘したいといふ、專ら藝術上の道義心から出たものであるとのこと。それも一つの理窟であらうが、そんな事は第二第三の問題である。觀西翁にして、今の文樂座に存在の意義ありや否やこれが翁の位置を決定する第一條件であらねばならぬ。然らずんば如何なる觀西翁の記錄は留めたにしても、卒堵婆小町の醜骸を見る痛ましさを感ぜざるを得ぬであらう。

所が、さすがは觀西翁だ、「これある哉」と感銘せざるを得ない事實にぶつつかつた。それは斯うである——

翁が入座して、最初の彈き場が、去年の文樂座十月興行の「二十四孝」で、紋十郎が八重垣姫を遣つた。その蓋があいて間もなく、翁は態々紋十郎を其の部屋に訪ねて、

「如何でせう、あの彈き方で人形が遣ひにくくはありませんか。」

といふ挨拶。紋十郎は意外のことに恐縮して、

「飛んでもないこと。大變結構で」といふと、

「イヤ、御遠慮なく云つて下さい。人形が動かされんでは文樂ではありませんからね。」

紋十郎は電氣にかゝつたやうな感に打たれて、「文樂座にこんな事云やはる人があろかいな」と、すつかり悅に入つたといふ事であるが、併し、これは、惡くとれば、觀西翁の挨拶代りのお世辭、人氣取りの安價な嬉しがらせとも云へぬことはあるまい。

所が十二月、新橋演舞場に引越興行の際。或る御客が觀西翁を招いての席上、それからそれへと文樂座の昔の話、今の話が出た時、觀西翁は床と人形の事に說き及んで、

「太夫は太夫で、人形に魂を送るやうに語り、三味線は三味線で、人形に魂を吹込むつもりで彈かねばなりません。」

と語つたとの事である。之は言葉は等しくないが、大阪で紋十郎の部屋で云つた事と其の意を同じうするものではあるまいか。これを以て見ると、曩の紋十郎への挨拶も、決して一場のカラ御世辭でなかつた事が窺はれるのである。

○

觀西翁の腕が、五十年の昔に比べて、どれだけ荒んでゐるか、凡化してゐるか、衰へたか、それとも愈々老熟して來たか。それは知らぬが、さすがに文樂の連中も、「あの老骨で」と其の腕達者に驚いてゐるのを見、又去年の十月、わざ〳〵東京から文樂見物に行つた或る御客の、「觀西翁の絃をも一度聽きたかつた」といふ土產話を聞いて、八十にして文樂座に復歸した心臟の强さよりも、其の腕の方がもつと强いことが分つて、尠からず人意を强うしたことは事實であるが、併しそれよりも何よりも、翁の「人形に魂を床から送れ」といふ、此の一言こそは、翁をして文樂座に於ける存在價値を決定的にしたものと云はなければならぬ。

○

併し、これは觀西翁獨創の名言ではない。嘗て名庭絃阿彌となつた松葉屋廣助も、弟子に稽古をつける時、少しでも太夫が自分を語らうとすると、「そんな語り方をして人形が遣へるか」と叱責したといふ事である。名人の至言、古今揆を一にするものともいふべき乎。そは兎まれ、今日の文樂座に唯の一人でも斯うした心構へを持つてゐるものが果してあるであらうか。

文樂といふ以上、太夫、三味、人形は三位一體であるべきである。「三位一體」といふ言葉は、英米思想排擊、わけて猶太思想撲滅の今日、耶蘇教傳來のものとして使ひたくない言葉ではあるが、併し此の言葉位「文樂」にピッタリあてはまるものはない。その耶蘇教に於ける「三位一體」の意義は、今の文樂人が考へてゐるやうな御手輕なものではない。今の文樂では「三業同架」か「三者同列」位の解釋が關の山で、「人形は語りの邪魔をするな」と注文をつけたり、「床が主で人形が從だ」と解釋したり、そして、人形が動かれうが

動かれまいが、我れ勝手な語り方をして更に人形を眼中に置かない。中には、人形を殺すばかりか、三味線の「のり」まで殺しにかゝるといふ、極端な個人主義の殘忍さへ發揮するものがある。これで何處に「三位一體」――はおろか、「三業同架」程度のジンギさへ有り得ようか。口に三位一體を唱へて、心に英米思想の個人主義を押し通す、そんな處に「文樂」は有り得る筈はない。「三位一體」たる以上、文樂には、「太夫」と「三味」と「人形」と三者個々の存在は無い筈である。其の無い筈の箇々が、今の四つ橋には嚴然と別々に存在してゐる。文樂座に「文樂」が無い所以である。（立派な太夫はある、立派な三味線はある。只「文樂」がないだけである。）

○

乍併、流石は鶴澤觀西翁、六七十年前の文樂で飯を食つた人であるだけに、「文樂」といふものをハツキリ理解し、確實に認識してゐる。「床から人形に魂を送れ」この一事で立派に嚴密なる三位一體の實が擧げられるではないか。猿廻しの猿も、上手に綱を曳き、鞭で叩けば、立つて躍る。床から魂を送つて、人形が寢ぼけてゐられよう筈はない。人形は獨りでは動かれぬ。宿命的に太夫の「語り」三味線の「間」につくより外に手はない。それだけに、案外頭が敏感で、床の「語り」や「間」にヂヤン〳〵頭をぢらす事がある。それは「床から魂」が來ない時からである。併し、觀西翁の如き心構へが床にあつたら、人形は寢ぼけてゐようにもゐられはしないのである。

觀西翁の腕のほどは私は知らない。併しこの心構への翁一人の存在は、今の文樂座に初めて「活」を入れるものとして眞に千鈞の重きを爲すものである。バラ〳〵の三位一體運中、時局がらかう云つても、須らく猛省すべきである。

（七頁より續く）

寺子屋は前があの通り呼吸一つの撥使ひですから、奥はもつとサラ〳〵彈かなければ聽手がつかれてしまひます。

他には別に記憶に殘つてる事がありません。一言も云つてゐない太夫と三味線の事ですか、聞いてゐないのもあり亦聞いてもすぐ忘れてしまつたものでせう。

總じて古靱さんと大隅さんとを除くとスバッと絃から離れて語る太夫らしい太夫がゐません。絃の方も若手に一きわ目立つ人も見えません。

三味線の腕の强い弱いは太夫の美聲と惡聲同樣で何とも仕樣が有りませんが、清六さんを追ひ越しそうな人の見あたらないのは寂しいと存じます。

五の變りは參りませんでしたので、お話も御座いません。

文樂通信

西尾福三郎

文樂座の三月は晝の部は鏡山の通しで、これは恰度歌舞伎座の方でも梅玉、魁車、宗十郎等によつてこの狂言が演ぜられてゐるので、彼此對照して見るのにまことに都合がよい。この頃よく歌舞伎の方と文樂座の方とで同一狂言を上演する事があるが、同一の作品が演出過程を異にしてどのやうに發展してきたかと云ふ事實を研究的に見るのに大層都合がよく、この意味で、松竹當事者の企劃を褒めるに吝かであつてはならない。

鏡山は珍らしく從來の花見の前に筑摩川の段と又助住家が添附されてゐる。所詮一貫したものに乏しい憾は是非もないが、又助住家などは語り物として、時稀耳にする折もあるが舞臺で見るのはこれが始めの終りかも知れない。見たところ一向にあざとい筋立てゞ、成程これでは誰にだつて喜ばれない筈だ。陰々滅々としてゐてこれでもか〳〵と云つたこしらへ物の悲劇で人形劇の悪いところ許りを羅列したやうな筋立てゞある。

この段の前を七五三太夫と清八、後を大隅清二郎が受持つてゐるが、この所暫らく振りで清八の絃に惹きつけられた外遺がの大隅もこの作品では力闘の甲斐もなく、折角乍ら骨折損である。草履打ちの新左衞門を期待してゐたが、これは休みで駄目になつてしまつた。

その他の場では、太夫人形共に特記する程の印象に殘るものは何もない。

◇

夜の部では、古靱の彦三が珍らしい。鏡山と云ひこれと云ひ、何れも三月と云ふ季題感を意識した扱ひ方に當局者の殊勝な氣持を諒としたい。今さら當然の事だが、この頃ではその當然事でさへ事改めて褒めねばならない程動もすれば怠られ勝ちになつてゐるのだ。

さてこの狂言、地味で澁くて一般向きはしさうにない。作

としての價値もあまり上品でなく、どちらかと申せば損なだし物である。しかし榮三の六助、文五郎のおその、政龜の母親と相まつて人形完璧の備へと共に結構な出來であつた。がしかし、今日の文樂に集まる素人のお客に喜ばれる商品でなく、どちらかと云へば古靱の書齋藝術の一つとして珍重はするが、決して前うけはしない、伊賀越の岡崎などと俱にこの人のものとしては讃否兩論何れが何れとも決しかねる。手堅いと云つてみたところでこの人のいつもの長所と云ふだけでそれは大してほめた事にならない。情の効く個所もしみ〴〵と心に迫る程の部分がない。おその色氣はどちらかと云へば乏しい位だし、一々拾つてみると相當にまだ〳〵求めたい個所がなくもない。所詮は作品そのものゝ價値に慊らぬ點があるからであらう。

切りに呂と織との合邦がある。後半の織太夫が遺がに力演だが、例によつて元氣に任せて語りすぎる。殊に合邦が若くなるのは爭はれない藝の若さで、もう少し力をセーヴした表現技術を考へてほしい。

右の外に忠八の道行きと新作偲ぶ佛があるが問題にしたくないものである。前者は光之助が光造と改名した披露のだし物で珍らしく榮三が戸無瀬を使つてゐるが、要するに珍らしいと云ふだけで、强ひて申さば文五郎のそれのやうに派手でないところに、ぢつとして位を保つてゐるやり方に味がある と云ふだけの事である。

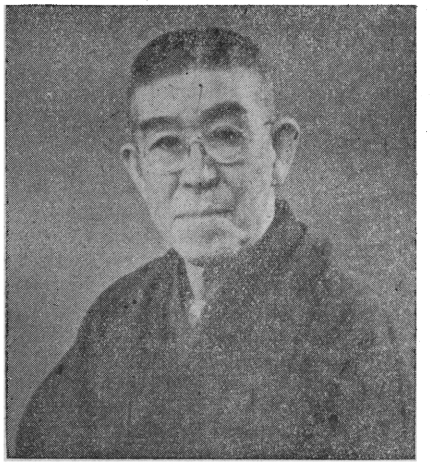
ひとりこの頃の文樂だけの現象ではないが、急激に素人の見物が增えてきて、この人達が玄人の見物を閉出してしまつたやうな傾向が著しい。何處の劇場でも、さうした聲をきくが、特に文樂に於ては急所やカン所を喜こぶ玄人の見物——と云ふより、それ目當ての半專門家の見物衆が多い中で、何も知らぬズブ素人が途方もない所で大聲に笑つてみたり、又紙芝居をみるやうな安易と物珍らしさだけで娛しんでゐるので、所謂定連と云ふ人々が迷惑を蒙る事夥しいものがある。特に文樂に關する限り、この玄人の見物を失ふ事は致命的な損失である事を思つて何とか對策を講ずる必要がありはしまいか。三月は大體二十五日打ち續けてゐるから不成績とは申されまいが、晝興行の赤字や、增稅の影響も考へたら、餘り安閑としてはゐられない狀態であらう。特に文樂に關して見物層の激變から感ずる寂莫感に痛切なるものがあるやうである。

◇

本稿執筆の翌日、卽ち文樂座の彌生興行が終つた三月二十五日の朝刊が、突如として、二代目豐澤新左衛門の死を傳へた。晝の鏡山に名を出し乍ら新太郎が代つてこの人の役所を務めてゐたが、さては病氣であつたのだなと始めて分つた。大團平の藝脈を享け続ぐ三羽鴉として道八、仙糸等と共にこの人の存在は、文樂の中に隱然として重きをなしてゐたが、それもつひに昨日の語り草になつてしまつた。思へば先月の脇が濱が最後のお目見得となつた譯だ。穩厚篤實長者のやうな面影のあつた新左衛門老、筆者は阪急沿線の伊丹通ひの電車の中でよくこの人と同車した事があつた。肩衣をつけた嚴めしい床の姿を見なれた目にこの人の普段の姿はいかにも音無しい好巧爺の感があつて、茶か俳句でも嗜みさうな超俗的な風格があつた。いつか京の南座の二月芝居に文樂がかゝつたか、或は文樂連の受持の芝居があつたかして、恰度この人が文太夫を彈いてゐた時で、その年の歳男に當つたとかで、張りぼて鬘を冠せられてニコし〳〵乍ら、福は內鬼は外を云ひ乍ら見物に御愛嬌を振りまいてゐた事のあつたのを思ひ出す。今日の文樂の三味線陣の內、艶物を彈いては將に獨秀、老いて益々艶ややかに、和かに、全くいぶし銀のやうに底光りする藝風であつた。晩年は不遇の氣味であつたが、その不遇を格別不遇とも感ずる風がなく、至極恬淡に超然として藝に遊ぶやうな風格さへあつたのはまことに人柄の然らしめる所以でもあつたらうか。一葉落ちて天下の秋どころか、次第々々に貴重な部分から崩れて行く古典の殿堂文樂座の將來に又しても大きな一つの風穴が明いた感じて、落莫の感一入深きものがある。

謹んで哀悼の辭に代へると云爾。

和樂氏を偲ぶ



故和樂氏は本名鈴木整吉、東京株式取引所一般取引員として兜町に鈴木商店を經營。溫厚篤實信義共に兼備、その德望は兜町を始め併せて帝都淨曲界に知らる。義太夫は明治廿七年頃より修得し今日に至る。昭和十八年一月廿六日午前一時十七分永眠、享年七十四。

（寫眞は鈴木和樂氏）

兜會顧問　中澤巴

和樂氏は明治廿七年頃に鶴澤才造、今の猿藏君のお父さんに就て義太夫を手ほどきされたのです。大正の初め一時休聲された事もありましたが、大正七八年頃から再び始められました。

小生が親しく交際をするやうになつたのは明治卅年頃で、それから今日に至り隨分永い交際でありました。

氏は其時代の燕作、豐吉、團吉(後の團左衛門)に師事し、小生等と一緒に團平にも就かれましたが、美聲といふ方ではなかつたので、從つて自然澁いものを好んで語られました。

其内でも吃又、鎌腹、沓掛などは得意のものでありました。

最後に猿之助にも就かれましたが、大阪素義界の古老で小勝といふ人にも非常に私淑してゐられました。

明治卅二年頃であつたかと思はれるが、水魚連といふ此時分の東都一流の素義大會が歌舞伎座で毎年一回續て三回開催されました。當時は三連と言つて東京素義界で屈指の會が三つあつて、一つは有名の鰻屋和田平の主人公和十氏(最近物故した和十とは別人)を頭目とする「和合連」一つは鱗氏を頭目として新橋の「鱗連」それに和玉氏を頭目とする「鶴寶連」がそれで、歌舞伎座の大會は此の三連が合同して「水魚連」と稱したのでありました。

小生は和樂、和聲氏などゝ和玉氏の鶴寶連に屬して當時の若手と言はれたものです。明治卅三年頃に竹内とをる氏も入會されました。

今は此會に屬してゐた語り手を始め三味線の燕作、才造、豐吉、團左衛門いづれも故人となり、現存者は三味線の觀西翁（當時の大造）と語左衛門の外、とをる氏と小生だけになつてしまひました。しかも、とをる氏は近來休聲でたま〳〵斯界に顔を出すのは、小生一人だけになつてしまひました。其當時の事を思へば誠に心淋しく、殊に素義界も時代と共に餘りにも變化した事は感慨無量に堪えませぬ。

兜會顧問　近江清華

私はあまり古い事は知りませんが、兎に角和樂さんは古い方であります。

兜會の會長は初め巴さんで次は松寶さん、それから又巴さんになつて、次は私に交渉がありましたが、此時に「和樂さんといふ先輩があるものを、氏にお願ひするのが當然であらう」と私は斷然辭退をして氏を推薦したのでありました。和樂さんはあの通りの謙遜家で、會長などゝいふ役柄は好まれなかつたので、會でも和樂さんには遠慮をしてゐたのでせうが、此時推しての願ひに承諾されたので、丁度十周年記念の會長でありました。

和樂さんは、兜町でも素義界でもあまり交際をされない方で、それで變屈かといふと決して變屈ではなかつた。氏には敵もなく又和樂さんが怒られたといふ事も聞かず、人の惡口を言つた事もなく、それだけに又人の惡口を聞くのも嫌ひであつたといふ溫順極みなき方でありました。

斯のような方でしたから淨瑠璃も眞の旦那衆風で、和樂さんなどがほんとうの素義といふのでせう。見臺を叩いたり伸びあがつたりせず、高座の態度と言へ、淨瑠璃と言へ溫厚そのまゝの個性が現はれて上品なものでありました。前うけなどは第二として精神の修養につとめられた氏は、無言のうちにこれを實行されたのであります。

氏は兜會の外最近では無名會にも關係されてゐましたが、病を得てから久しく休聲のまゝ遂に永眠せられた事は寂寞の念に堪えません。

◇

豐澤猿藏

和樂さんは十九歳頃から義太夫のお稽古をされましたさうで、最初は私の父才造(初代)に就いて手ほどきされました。何しろ私などはまだ產れる前の事で、豐澤團平、豐澤良平、先代の鶴澤燕作、今の赤坂の師匠豐澤猿之助などに師事されました。赤坂では吃又、毛谷村、坂の下、寺子屋などをおこさいになりましたやうです。

昔は本籍へ出る人は、素人の稽古はしない事になつてゐましたので、赤坂の師匠も矢張素人の稽古はしなかつたのですが、和樂、巴、和玉さんあたりに引き出されて、追々素人衆のお稽古もするやうになつたらしいです。それは明治四十三年頃かと思ひます。

和樂さんは良平師匠に一番多く彈かせてゐられましたやうで、沓掛、忠六、志渡寺、赤垣、沼津などよくお語りになりました。私は和玉、和聲、巴、和昇(故巖太夫)、和樂さんなどの和合連といふ會の頃から彈かせていたゞいて廿七八年になります。

和樂さんは謙遜深い方で、おそらく切をお語りになつた事はなく、切に當ると「切は厭だから」といつも口へまはつてゐられました。

兎に角義太夫の外に趣味も道樂もないといふ程の方で、震災の時には蠣殼町にお住ひがありましたが「何にも出さなくともよいから義太夫の本だけを出してくれ」といふので、秋孝が家へ飛び込んで、義太夫の本を持ち出したといふ位であります。

兜町では和樂さんのお怒りになつた顏を見た人はないといふ程溫厚な方で、私なども永い間一回も厭な顏をされた事を見ませんでした。そして私の氣付かない點はいつも御親切にお教へ下さいました。

一月廿五日は御誕生日で、毎年私は此の日にお招きに預つてゐましたが、今年は廿四日に來るやうにとのお言葉で、廿四日にお伺ひ致しましたが、これが逢ひ納めで翌廿五日に御發病、廿六日に永眠されたのであります。

御生前の御厚情を感謝して追慕の念を禁じ得ませぬ、御冥福をお祈りして居ります。

社告

弊誌「太棹」儀、毎度御愛讀御援助を蒙り難有うございます。就きましては地方の皆樣には誌代を振替へ御拂込み願つて居ますが、拂込むといふ事は一々用紙に書込んだり局へ行つたり、誠に手數で憶劫なもので何んとも恐縮に堪えませんが、以前と違ひ集金郵便の中止になりました今日振替を利用する外、方法がありませんので、前金切の際にはお知らせと共に封入の御拂込み用紙で、御手數乍ら何卒よろしく御願ひ申上ます。

なほ半年一年と經つてゐる方々は帳簿の整理もありますので此際何卒御拂込みを願ひ上げます。

太棹社

東橋亭懷古

岡田蝶花形

二月一日から東橋亭が復活した。その記念日に私も招待されたが、差支へありどうしても行かれないのであつたが、宛も尊敬する先輩貴族院議員の下村宏(海南)博士から、昔なつかしい東橋亭へ行きたいと便りがあつたので、二月一日の招待狀を差上げて置いた。博士は御夫人同伴で其の夜行かれたさうで、その時の感想は雜誌「旅」に連載されて居る五十年前の東京にでも出るかと思ふが、私の雜誌(淨曲研究三月號)にも其の寸評を頂いてあり、私の感ずると同樣に、賞めるところは賞めてあり、又舞臺で太十のカケ合に光秀(染登)と十次郎(綾千代)とがひそ〳〵話し合つたなどは怪しからぬと痛いところを突つ込まれてあるのなど感心した。

其の後いろ〳〵の案内に寸暇もなく行かれなかつたが、やつと三月二日夜に日大藝術科講師普門曉先生を御案内するので、六時から行つたがバラ〳〵と四十人許りの入り、これで席料もどうやら出て電車賃ぐらゐ持ち出さずに濟んだといふもの、往年の女義華やかなりしころの二百、三百の入りと比較して何といふ衰滅であらう。最早義太夫とはタヾで福引をつけなければ聽くものもないと見えて文化、交正、相互をノシてあるく老婆の一隊も見えない。

それで初段御祝儀の代りの御所(佳代子、綾作)かたみ片袖の方であるが、有望とはいへない。巡りあひは不可や正。本下(佳仙、綾作)行く水のよりであつたが難はない。紘は兩者ともあまり合つてゐない。日吉(素次、清三)少しも印象が殘らぬ。油屋(住若、清一)本夜の眞打としてもよろしく一番の出來、いつの間にかモタレの婆ダレと化したかの感、安達(越駒、津賀昇)別に妙味とてないが落着を見せた、段切れ紘が切れてから調子が狂つて、聽いては居られない。

さて當夜の感想はこの位にして、昔を少し懷古すれば、明治十一年竹本京枝が名古屋から上京、東橋亭に旗上げして以來、大阪、名古屋の女義で初看板は東橋亭又は宮松と定まつたものである。その東橋亭の入口が路次になつてから、昔の同好者へも一度行つてくれと賴んでも分らぬ位になり、第一その點で價値がなくなつた。

次に毎晩興行してないといふのであつたが、これは今年から何日に行つても毎晩あるやうになつたが、何時も同じ顏ぶれでは客を引けない。第一藝、第二容貌である。この二つを揃へた若手でも大阪から東上させて東京人へ賣り込ませるとすれば二百三百の入りは毎晩でもあると思ふ。

私が久し振りに嬉しかつたのは、あのキーキー聲の明晩の語り物の披露であつた。それから中入にも少し何か工夫して貰つてもらひたい。何も賣らないといふのはひどい(昔は箱詰めの壽司が賣られ私はそれを好んで買つた)これは時節柄無理かも知れ

ぬ。

その他大事なことは、毎晩の語り物を新聞に出し（少し宣傳費を寄附する人はないか）眞打は必ず一段全段をやる事とし、その他も語り物を變へぬ事である。次に感想にかへ和歌を以て終る。

▽

一高の帽子ふところにねじこみて東橋亭の畳を通ひし

▽

わが通ふころの眞打太りたる初代團雀いつまた聽かむ

▽

切前の花形なりし春昇の面影のこしてうれしや越駒

▽

目つむれば三十年は一昔わが眼の前は春昇ならずや

▽

花川戸新看板に灯の入れば立ちさりかねし東橋亭なり

マニラより

三五郎

――前略――

此間十二月中の東京新聞を見まして、思ひがけなく齋藤氏の御寄稿、安藤氏の文樂評を拜讀、なつかしく思ひました。太棹の御本山文樂も近來仲々の御繁昌で結構ですが、御本山とは云ひながら我々に隨喜の涙を流させてくれる名僧知識は今案外少ないようですね。もつと〳〵難行苦行させなくては駄目だと思ひますね。

十二月の文樂は菅原の「筆法傳授」が出たようですが珍らしいものが出ましたね。私はずつと以前大阪で見てよかつたことを覺えてゐます、菅原などは今更ながら名作だと思ひますね。前後照應の妙は云ふ迄もなく、どこを切取つて來ても夫々に滋味興趣津々たるものがありますかられ。淨るり道に脚本の貧困はないといふことが安藤氏の御說で判りましたが、澤山の瓦礫の中から玉を搜し出すことが問題だと思ひますが如何。

もつともそう云ふことは其の道の人達の御取捨撰擇にお任せして、我々大衆ファンはとにかく珍らしい、いいものを今後澤山聞かせてほしい、見せてほしいと思ひますね。そして三業の各古老の健在中に是非夫々「筆法傳授」をさせておきたいものですね。尤も今の文樂には希世ばかり多くて、肝腎の源藏はゐないかも知れませんが。

私は今、マニラで太棹の音に餓えてゐます。やつと見付けたレコードが呂昇の十種香では未だ飢餓を救ふに足りません。ですから今迄見物した場面を反芻したり、古靱清六の忠九で榮三の本藏ならどんなに好いだらうかとか、古靱清六の逆櫓で榮三が權四郎に廻つたらどんなだらうかとか、一種の自慰にふけつて纔に抑へてゐます。

そして古靱、清六、道八、仙糸、榮三、小兵吉に遙かに盡させぬ思慕を寄せてゐます。

南方迄來て文樂の話でもありますまい、以上は午睡の譫語と大樣に御聞捨て、否御讀捨て願ひます。

（一月十九日）

太棹社彙報

◎本欄は大會又は新生の會を報道致します。
◎開催前月に詳報したものは開催後の記事を略します。
◎持種の催ほしの外、前書を略します。
◎番組御送附なきもの、或は通信なきものは記載洩れとなります、御諒承を乞ふ。（掲載順不同）
◎なほ見出しに二號活字を使用、持別掲載方御希望の會は其旨御一報を乞ふ。

太棹社

東部五十義會

東都五十義會の第卅八回春季大會は六月廿三日より四日間に亘り日本橋倶樂部に於て開催する事になつたが、出演者定員は一百名で、出演規定は前回の例に依る。

鳩美會春季大會

帝都女流素義會では女天會があり、これは又新らたに昨秋生誕した同じく女流素義の一團、中には女天會の會員も加つてゐるが、主として女天會々員外の團結。春季大會を三月十二日正午より並木倶樂部に開催。

女夫會春季大會

女天會は第五十八回を重ね三月十七日午前十一時半より並木倶樂部にて春季大會を開催。

本下（本藏、喜らく。若狹之助、里芳。三千歲姫、以與子。伴左衞門、喜香。新造）酒屋（叶、龜造）忠四（喜らく、勝助）紙治（叶昇、新造）戀十（里芳、勝助）寺子屋（一光、扇之助）鮨屋（喜香、猿喜知）先代（登盛、猿昇）濱松（苾玉、扇之助）白石（久松、新造）野崎（芦鶴、仙十郎）宿屋（以與子、良造）新口（喜代子、三福）先代（春榮、龜造）中將姫（扇幸、扇之助）三代記（榮子、仙十郎）寺子屋（歌子、勝助）安達（翠松、新造）山名屋（里松、良造）忠九（歸世花、團市）堀川（與次郎、叶。母、叶昇。お俊、翠松。傳兵衞、歌子。おつる、春榮。龜造、扇之助）

淨曲羽扇會生る

森內六花、湯淺光玉、高瀨一昇、三並義昌、井上巽、岡本柳光、澤部其角の諸氏に依り「淨曲羽扇會」が生誕、四月一日正午より上野松坂屋ホールに於てその第一回を開催。

太十（六花、清一）合邦（一昇、染登）鮨屋（柳光、綾之助）寺

子屋(其角、猿平)安達(義昌、綱助)新口(光玉、綾之助)玉三(巽、絃平)

日本精神作興の會

大日本淨曲協會主催の「日本精神作興の會」は諸々準備の爲め三月を休演して四月廿日より廿四日迄五日間上野松坂屋ホールに於て開催する事になつた。同會は目下會員募集中にて五千名の會員に達する場合は少なくも開演日數十日間を要する事になり藝題の毎日替りも必要なく、今回は試みに五日間同藝題を以て通ふす事になつた。番組左の通り。

御殿(重之助、猿幸)堀川(山生、猿藏、ツレ、松四郎)以上人形部(桐竹梅子改め東金之丞、東佳照外)戻り橋(綾之助、仙玉)以上義舞部(東佳照、東吉代)

東都聲義會

同會の春季大會は五月十四日より三日間茅場町宮松亭にて開催。出演申込みは四月廿日締切、三日間約六十名の豫定。同會々長齋藤山生氏は協會の事務多端の爲め今回會長を辭任幹部は井上和風、本城冠之、山田壽瓢、堀ときわ、黒川叶、神馬里芳の諸氏である。(以上順不同)

鈴木和樂氏追善會

一月廿六日永眠せられた鈴木和樂氏の追善義太夫會は前號に四月廿六日と報道せし處、折よく會場の空きが廿五日の日曜となり、既報の如く鈴木家施主、兜會後援の下に廿五日正午より並木倶樂部に於て本門寺の讀經に引續いて左記番組に依り盛大な追善義太夫會が催ほされる事になつた。

初手向(兜會代表可笑)並櫓巴、猿)添手向、寺子屋(清華、猿之助)追手向、日蓮記(和可葉、猿三郎)屹又(殿母太夫)酒屋(松寶、良造)戀十(長平、未定)紙治(銀水、猿藏)忠九(關路、猿之助)近八(清、未定)太十(掛合)(光秀、團壽。十次郎泉。初菊、もみち。操、三葵。さつき、朝正。久吉、加保留猿平)安達(美峰、猿之助)合邦(操、道之助)大晏寺春和、絃平)彌作(光樂、綱助)岸姫(千鶴、猿平)引窓(枝梗、綱助)十種香(掛合)勝頼、美浪。八重垣姫、春樂。濡衣、其晶。謙信三幸。六郎、美峰。小文治、錦。猿之助)狐火(清華、猿之助ツレ、猿藏、琴、松四郎)

豐竹猿春公演會

豐竹猿春公演會は例に依り猿春後援會主催にて三月七日午後六時より有樂町產業組合中央會館にて開演。

忠六(佳仙、清二)戀十(重之助、勝八)揚屋(素昇、猿玉)伊賀五(猿春、三生)阿古屋(阿古屋、住若。重忠、重之助。岩永、素昇。榛澤、佳仙。絃、猿幸。三曲、松四郎。ツレ、三生)。

義太夫古曲發表會

古曲發表會は並木倶樂部に於て四月二日正午開演、四時半終演の晝間公演を以て開催したが、頗る好成績であつた。

辨慶(卯太夫、和孝)山名屋(巴太夫、猿喜知)二度目(朝見太夫、美之助)聚樂町(駒登太夫、松市郎)彌陀本願三信記、道行花の旅より三都三自慢迄(加古千加女作、豐澤團平作曲)蓮如上人、お福、巴太夫。弟子、女太夫、卯太夫。お德、芥太夫、朝見太夫。お金、猿廻し、駒登太夫。絃、芳太郎。ツレ、猿喜知、扇之助、美之助、絃內、松市郎、和孝)日高川渡し場(清姫、朝見太夫。絃、和孝。船頭、卯太夫。絃、扇之助)あやつり人形(清姫、孫三郎。船頭、孫太郎)なほ次回は十月二日同倶樂部にて同じく晝間公演に決定。

竹本素女會 第廿八回

歌舞伎、明治、或は東劇と專ら大劇場に進出、春秋二回の大會を公演してゐる竹本素女會は三月廿六日午後四時より東京劇場に於て第廿八回春季公演會を華々しく開催した。

宿屋(深雪、綾千代。駒澤、團雀。岩代、佳仙。德右衞門、彌昭。川どめ、津賀重。絃、三平。琴、團秀、壺坂(素八、駒登久)太十(素廣、猿昇)湊町(小津賀、紋敎)寺子屋(住若、清一)新口(團司、小住)鮨屋(素女)良辨杉(櫻の宮)渚、春昇。玉屋、猿春。花賣、素次。市人、彌周。里人、玉惠。絃、猿玉、三生、津賀昇、清三)

義太夫因會春季大會

日本義太夫因會春季大會は前號既報の通り並木倶樂部にて五月七日午後二時より左記番組に依り開催。

千兩幟(おとは、路太夫。猪名川、駒登太夫。鐵ケ巖、巴太夫。大阪屋、隆太夫。猿藏、扇之助)柳(都太夫、新造)安達(杣太夫、松市郎)戀十(津彌太夫、津賀助)忠六(卯太夫、美之助)灘(駒登太夫、扇之助)新口(朝見太夫、芳太郎)忠九(近衞太夫、松四郎)紙屋(稻太夫、良造)沼津(紅葉太夫、猿三郎、ツレ、美之助)本下(巴太夫、猿喜知)先代(路太夫、絃平)大切、壺坂(澤市、朝見太夫。お里、近衞太夫。觀世音、稻太夫、猿之助。ツレ、猿平、猿藏、猿喜知、猿三郎、松四郎)

本誌後援 名譽會員

（イロハ順）

（東京之部）

廣瀬いろは氏
水戸部いづみ氏
木村一司氏
鈴木一信氏
高瀬一昇氏
荒木一泉氏
關口一樂氏
關口以與子氏
吉川浪補氏
櫻井呂光氏
森内六花氏
阿部一氏
橋本梅月氏
中村白猿氏
和田春和氏
西野巴洲氏
佐藤巴偶氏
北島北斗氏
宮内ほくろ氏
佐藤平之助氏
中澤巴氏
安藤どくろ氏
吉田登盛氏

小川都山氏
田中都十氏
岡崎都洲氏
安藤都竹氏
安藤都昇氏
平野都平氏
大熊都仙氏
葛和都玉氏
福水都樂氏
國友東光氏
高橋東好氏
外山富彌氏
堀ときわ氏
緒方千晴氏
栗原千鶴氏
久米中次氏
岸竹史氏
松本千鳥氏
河守痴樂氏
神馬里芳氏
林林昇氏
金子里松氏
吉田龍昇氏
本木大熊氏
岡本岡氏

林和勢氏
青山和曉氏
飛石かなめ氏
加藤兜氏
高橋可遊氏
黑川叶氏
米澤雅樂氏
岩崎がん昇氏
八木勝駒氏
須賀佳津子氏
大用大嘉津氏
小森叶昇氏
田口辰壽氏
井上巽氏
小林太二八氏
根本團壽氏
野田高尾氏
小柳團鳳氏
杉山橘氏
坂倉素遊氏
井上素鳳氏
川口子太郎氏
太田無涯氏
萩原うつぼ氏
島うつぼ氏
小鹽潮氏
乃村乃菊氏
水野昇氏
中野呉羽氏

石川華笑氏
本城冠之氏
山下彌生氏
岡田彌聲氏
篠倉山門氏
福中又糸氏
長谷川文久氏
上杉文盛氏
安部富士登氏
鈴木兒雀氏
安藤光樂氏
原田越巴氏
河野國聲氏
松岡語松氏
田中湖月氏
湯淺光玉氏
田中廣笑氏
保谷紅司氏
中島古平氏
山崎向陽氏
中田五口氏
上田語好氏
岡崎圓六氏
桑原永樂氏
寶藏寺天昇氏
堂野前鐵幹氏
淺井花氏
大築蝶葵氏
及川旭氏

柳有明氏
中川愛氷氏
藤牧淡路氏
影山淺路氏
坂本あるを氏
奥村三玉氏
寺岡三幸氏
木村さかえ氏
齋藤山生氏
平井榮氏
橋本三司氏
藤田三壽氏
細川清氏
金田金鳳氏
錦錦松氏
淺田奇聲氏
星野桔梗氏
野島貴昇氏
歸山歸世花氏
平井軌外氏
橋本掬月氏
乾桔梗氏
武笠吉樂氏
增田喜城氏
增田喜香氏
和田金扇氏
澤部其角氏
荒木キクヱ氏
麻田喜らく氏

佐久間喜勇氏
吉川喜照氏
西村喜光氏
岩木義雀氏
吉良蟻若氏
山田義昇氏
三並義昌氏
吉坂玉鳳氏
保坂有曲氏
西村游史氏
岩田末成氏
高瀬操氏
吉田美地句氏
横井三由氏
野口みなと氏
北村三葵氏
吉田三芳氏
村上美津豆氏
須田美義氏
鈴木松寶氏
小原松樂氏
伊藤松鶴氏
龜田松花氏
三口松藤氏
菊地秋月氏
花房紫蝶氏
山田壽瓢氏
田口司重氏
倉田司樂氏

濱口秋華氏
打矢晉水氏
中島新華氏
西内昭平氏
永野神風氏
高瀬靜氏
高品一重氏
平山平茶氏
福安瓢登氏
桑原美峰氏
池田美尙氏
魚崎美福氏
松岡茂里雄氏
白井清華氏
近江清華氏
佐藤清司氏
井上聲鳳氏
的野關路氏
富岡生昇氏
沼井盛鶴氏
時田靜史氏
江原清昇氏
三浦扇華氏
德永靜翠氏
仁木翠松氏

（地方之部）

米國 杉山陶岳氏
同 兼廣廣玉氏
同 西本西紫氏
大阪 氏家鶴峰氏

神戸 岡田源氏
大垣 吉岡十八公氏
船橋 川奈部銀司氏
同 安東悟堂氏
下關 保良鈴鳳氏
横濱 鈴木香雀氏
同 田中呑笑氏
同 小林榮玉氏
同 田島集樂氏
平塚 國森鳴門氏
川口 傍島紀鳳氏
同 行田以呂波氏
長野 田中美穗氏
八幡 古賀大彌氏
靜岡 加藤壽松氏
同 森魁氏
同 山本梅笑氏
同 渡邊正勇氏
清水 久保田聲保氏
同 栗田錦昇氏
同 西貝湊氏
同 榊原安樂氏
濱松 飯田自樂氏
同 宮川はじめ氏
同 佐藤和聲氏
同 片橋國榮氏
安東 岩崎山彥氏
北京 關長門氏

消息會報

三好會

森、三好

昨年春靖國の社に神鎭まります戰歿將士の遺家族上京の時、雅叙園に招待し晩餐の後遺族の慰安義太夫を催したが、今年も又四月二十四五日頃同園又は春日町大國にて、岐阜縣菅田町の御遺族を招待し當會の義太夫を若干づゝ催し慰問する事になつた。藝題は當會津滿子のすしやを始め、箱根靈現記躄の仇討三人上戸、三好彈語りの豫定。

□素女淨曲研究會　三月二十八日午後六時より相互倶樂部にて第五十四回を開催。

佐太村(喜香、猿喜知)先代(登盛、猿昇)逆櫓(若狸、猿昇)彦九(猿春、紘三生)なほ五十五回としては故豊竹巖太夫三週忌を兼ね四月二十七日午後五時より新橋驛前藏前會館にて開催、豊澤廣助大阪より上京紙治内を語る由。

□綾秀會　三月十九日逝去した竹本綾秀師の連中を以て組織する「綾秀會」は永年會員の出入もなく、極めて圓滿に持續して來た事は師生前の稽古熱心と德望とに依るもので、追慕の念止み難く會員一同相圖つて師を偲ぶよすがとして會名そのまゝ繼續する事になつた。

□新養精會　素義新養精會の第二回は下關支部の擔任にて四月十六日より廿日迄毎日正午より門司市稻荷座に於て開催。審査員は伊東柳平、西村紫紅奥田利生、吾孫子櫓、澤田金聲、三木金星、豊澤團友の七氏。

□女義若女會　第六十五回を四月一日午後五時半東橋亭にて開演。柳(佳世子、綾作)野崎(素次、清三)安達(綾之助、清一)沼津(素八、駒登久)太十(重之助、勝八)

□坂東勝治一座　坂東勝治一座は四月二日より十日間池袋會館にて連夜大入滿員の盛況を呈し、十三日より二日間は武藏野町高等學校にて產業戰士慰安會を催ほしたが、十八、十九兩日は並木倶樂部に久々開催の後、五月は信州より越後路を巡業に決定。

□竹本扇賀太夫追善　五月廿三日は、竹本扇賀太夫の一周忌に相當するが、息三津雄君は應召中病氣の爲め千葉陸軍病院にて加療、全快と共に何時出征するやも計られずと、竹本米翁氏補導、日本義太夫因會の後援を得て四月十三日午後一時並木倶樂部に亡父扇賀太夫の追善義太夫會を催ほした。

當座帖

▼傍島紀鳳氏　怪我をして久しく溫泉に靜養中昨今良好にて歸宅。

▼近江清華氏　滿洲方面旅行中の處四月十日歸京。

▼鶴澤觀西翁　昨冬演舞場打上げ後熱海溫泉「聚樂」にて靜養中なりし同師は四月興行より再び大阪文樂座に出勤

▼竹本三瀧太夫　竹本叶太夫を襲名し四月興行文樂座にて披露。

▼鶴澤友花　鶴澤燕三と改め四月興行文樂座にて披露。

▼鶴澤紘吾　古曲發表會に新加入。

編輯後記

★百四十三號が出來ました。今度は思ひの外順調に運びました事はうれしい限りですいつも此樣に手順がつけば氣もくさらず、活躍力が增進する事でございませう。

★齊藤山生氏は淨曲協會の理事長に就任以來事務多忙の爲め、永年關係してゐた淨曲會、長生會から退會(此方は名儀だけなく事になり)東都曲義會の會長も辭任、今後は專ら協會の事業發展に努力さるゝ事になりました。

★川口子太郎氏は今年から「淨曲端場の研究」を執筆して本誌に連載するといふ豫言がありましたが、それは一月の事で未だ何んの御寄稿もありません。中川愛氷氏の言はるゝ有名な窶坊が早起きになつても就職の爲め矢張忙しくなつたものと思はれます

★鶴澤觀西翁師は昨冬新橋演舞場を打上げ後久しく熱海の聚樂で靜養中でありましたが、四ッ橋文樂座の四月興行から再び出勤して夜の部の「阿古屋」で伊達太夫、相生太夫、長尾太夫、文字太夫等の掛合をツレ喜左衛門、三曲勝太郎でいゝ音締を聽かせてゐるといふ旺盛振りでたのもしい事であります。

★内田三千三氏から三つの女義會評が屆けられましたが、頁の都合上次號にまはさせていたゞきました。

☆一月永眠せられた鈴木和樂氏の事に就き永年交誼のあつた中澤巴氏、兜會々長近江清華氏、最近では一番永く三味線を彈いた豊澤猿藏氏のお話を掲載致しました。又宮島和紅氏から御懇切なる御書面に接しました事を深謝致します。　——編輯部——

第百四十三號　(毎月廿五日發行)

定價	一部	六月分	一年分
	金五十錢	金三圓	金五圓
	郵稅一錢	郵稅共	郵稅共

▼誌代は總て前金御拂込の事
▼なるべく振替に御送金の事
▼郵券代用一割增

昭和六年三月二十三日印刷納本
昭和六年三月二十五日發行

東京市小石川區音羽町一ノ四
編輯兼發行人　富取壽鹿

東京市小石川區指ヶ谷町四
印刷人　杵淵五郎

東京市小石川區指ヶ谷町四
印刷所　柏葉社　市東一三八三

東京市小石川區音羽町一ノ四
發行所　太棹社
振替東京三一七八五番

昭和十六年三月廿八日
第三種郵便物認可

昭和十八年三月廿八日　印刷納本
昭和十八年三月廿一日　發行

（毎月一回　廿八日發行）

太樟（第百四十三號）

（定價五拾錢）